

# 「大谷新時代」が いよいよスタート!

## 大谷の魅力と現状、そして未来

宇都宮市西部に位置し、石の里として知られる大谷町に、いま新しい動きが始まっています。大谷のこれまでと今後を取材しました。

### 「大谷石」は 全国区のブランド

宇都宮市と言えば「餃子」「ジャズ」「カクテル」のイメージがありますが、特に知名度が高いのは、日常の食べものである餃子でしょう。宇都宮餃子は、いまや全国区の知名度です。

そんな中、大谷石も実は餃子に負けず劣らず高い知名度を誇ります。中学校や高校の教科書をひもとけば、ほとんどの場合「凝灰岩」の代表として、大谷石の名前が掲載されています。つまり大谷石は、餃子に負けず劣らず、宇都宮市を代表する存在とすることもできるのです。

では、大谷石がなぜ凝灰岩の代表として知名度が高いのでしょうか。それは、フランク・ロイド・ライトが設計した、旧帝国ホテルのおかげです。現在のように大谷石が建築材料として広く認められるようになったのは、帝国ホテルがきっかけで

した。その帝国ホテルの完成は、大正12(1923)年9月1日——奇しくも関東大震災その日のことでした。その日、周囲の建物が地震によって次々と大きな被害を受ける中、帝国ホテルは軽微な被害で済みました。このことがライトの設計の確かさとともに、大谷石の名声を高めたと言われています。

明治に入って飛躍的に進歩した交通網、特に鉄道の発達も、大谷石が全国に名を馳せる大きな原動力でした。大谷町と宇都宮市中心部とは人力による人車鉄道で接続され、その後、大谷石材鉄道の開通により蒸気機関車も登場。大谷で切り出した石材を宇都宮から中央へ、全国へと運搬する近代的交通網が整備されたのでした。

(有)高橋佑知商店の取締役であるNPO法人大谷石研究会の高橋啓子事務局長は、「大谷の石屋は明治14(1881)年には14軒だったそうです。それが、最盛期の

の有名なものから、路傍の草の中にある小さなものまで、たくさん民間信仰の証があります。

戦後になって建立された「平和観音」は、現在も観光の大きな目玉です。平成元年以前に宇都宮市で小学生だった人であれば、まず間違いなく、遠足などで大谷公園とそこに建つ大きな平和観音を訪れているはず。

今度大谷を訪れたら、大谷公園を振り出しに祠や石仏を訪ね歩くのも、おもしろいのではないのでしょうか。そしてこうしたものが多いことも、大谷町がいかに栄えていたかの証明でもあるのです。

そしてもちろん、大谷町の最大の魅力は、自然の風景と採石跡が絶妙にミックスして生み出された「大谷奇岩群」と呼ばれる

風景でしょう。大谷公園にある「天狗の投石」や大谷景観公園の「御止山」などの名前のついた景観だけでなく、どちらを見ても巨大な岩肌とそこに切り込んだ採掘跡、そしてすべてを包み込む木々の緑に圧倒されるでしょう。また地下採掘跡を堪能できる「大谷資料館」は、東日本大震災後の閉館期間を経て、現在も大谷観光の目玉であり続けています。

宗教施設、歴史遺産、そして自然——まさに三拍子そろった地域であることが、大谷町の大きな魅力なのです。

### 長く続いたダメージの 回復が急務

ところが、現在大谷町を歩いてみると、決して観光地としての魅力にあふれているわけではないことを、誰もが感じるでしょう。大谷町の入り口である大谷の二又路から大谷街道を大谷資料館へ進んでみても、飲食店や土産物の店舗はほとんどなく、道路両側の整備も決してよい状態とは言えません。大谷公園近くに広い無料駐車場がありますが、ここに置かれた案内板はひどく古びたままです。

観光バスは今も多くの観光客を運んでいますが、その多くは大谷資料館や平和観音などをピンポイントで見学し、そのまますぐに別の場所へと移動してしまいます。

このように、現在決して観光が盛んとは言えない大谷町は、実は地域を支える産業であったはずの採掘業も低調になっています。大谷石研究会の高橋事務局長によ

れば、現在10社を切るところまで減少しているとのこと。その大きな理由は、平成元(1989)年に起った、大規模な陥没事故です。約30年前、産業も観光も大きく栄えていたその時に、大谷石を採掘した跡が何カ所も大規模に陥没し、大きな穴を地上に作ってしまいました。幸い、死者などは出ませんでした。幸い、死者などは出ませんでした。幸い、死者などは出ませんでした。



NPO法人大谷石研究会  
高橋啓子事務局長

このダメージが現在も尾を引いている、という人もいます。確かに、昭和63(1988)年には100万人を超えていた観光客数入込客数が、陥没事故の生じた平成元年には80万人近くまで落ち込み、その後長く下降を続けました(平成18(2006)年に一時期回復を見せましたが、その後の東日本大震災により再び落ち込みました)。陥没事故のダメージが長く続いたことは、数字から見て取れます(図3)。

その一方で大谷石の生産量は昭和49(1974)年をピークに減少を続けてきていました。確かに平成元年以降の落ち込みは大きいのですが、陥没だけが理由ではなかったとも考えられます(図2)。また、大谷町の人口も昭和53(1978)

図2 大谷石生産量(t)

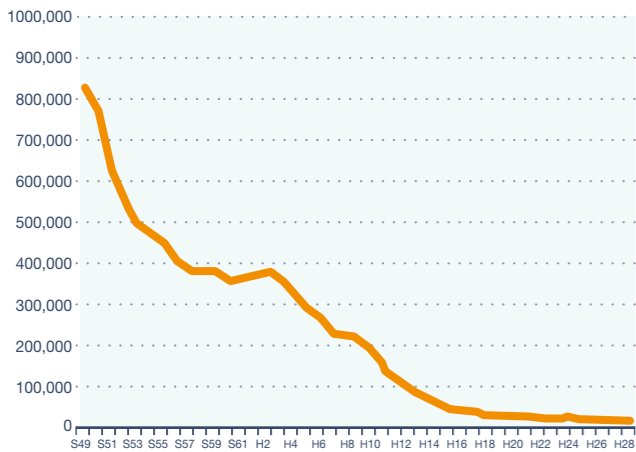
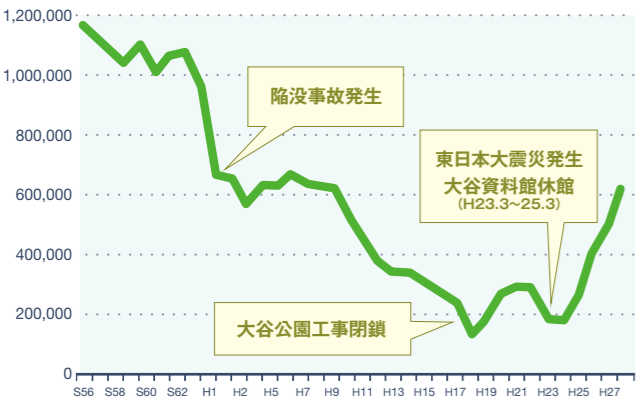


図3 大谷地区入込客数(人)





大谷景観公園

ほ解消されたと言っているでしょう。そこからどう構築していくかが、大谷町だけではなく宇都宮市全体の課題となつていきます。

宇都宮市にとっても、観光客入込客数の増加は大きな命題です。大谷町という優れたポテンシャルを持つ観光資源の活用は、宇都宮市の観光産業にとっても大きな影響が考えられるのです。

### 観光マップなどで広く情報発信

「連休は、かなり人が出るようになってきましたね」

そう話すのは、大谷商工観光協会の池田克雄会長（株池田石材工務店社長）です。

同会では「石の里大谷」と題した観光マップ兼パンフレットを製作し、大谷町の名所旧跡や観光ポイントを紹介するとともに、会員の企業や店舗も掲載することで、商業活性化を図ろうとしているそうです。

「いまは多言語化をめざしています。同時にホームページを作成し、公開にこぎつきたいと考えています」

インターネットで情報発信をすることにも、来訪したお客様に写真を撮影していただき、それをまたネットで公開していただくことで、相乗効果が起こることを期待しています。

「岩の持つ表情とか、岩肌の魅力などは、直接足を運んでふれていただくことが何より大切。そのために、どうやったら効果的な情報発信ができるか、工夫しています」

など、健康にとってプラスになる効果もたくさんあります。そういったすばらしさも、多くの人に知っていただきたいと考えています」

高橋佑知商店では、約40年以上前から坑内掘りをやめ、露天掘りに切り替えています。現在も、会社の裏側にある山で露天掘りを行なっています。

「予約制で露天掘りの見学や体験もできますよ。年間300人くらい来てくださっています。大谷石の露天掘りは現在ではほとんど行なわれておりませんから、地元の方でも実際にはあまりご覧になったことが無いと思いますね。加工工程全体を見ていただくと、皆さま非常に興味を持ってくださいます」

同社が露天掘りに切り替えたのは昭和の後半ですが、陥没事故が理由ではないとのこと。コスト的なことから露天掘りを始めたのですが、それが逆にプラスになつていると話します。

今年で17回目となるイベント「フェスタin大谷」も、高橋事務局長など有志が中心となつてスタートしたものです（大谷石研究会とは別の事業）。いまでは大谷観光の目玉イベントとして定着しています。その一方で高橋事務



（前）高橋佑知商店から見た露天掘り



大谷商工観光協会  
池田克雄会長

マップには観光ポイントも詳しく掲載されており、これ一つあれば観光客が大谷町を満喫できる内容となっています。これに加えてホームページが開設されれば、より多くの人にアピールができるでしょう。

「会員にロッククライミングのジムや乗馬クラブ、パラグライダースクールなどがあります。そういった体験型の楽しさも、これからの大谷には必要ですね」

また同会では毎年夏に「大谷夢あかり」というイベントを開催しています。大谷石で作ったロウソク立てでロウソクを灯し、大谷公園全体を幽玄な雰囲気包んで、そこでミュージシャンのライブなどを開催しています。

「大谷は地域型の観光地。地域の魅力を充実させて、それを紹介し、来てくださる方をおもてなしすることが、重要だと思えます。ただ、地域だけでできることではありませんから、官民一体となった取り組みが不可欠です。会も充実して来ましたので、これから県や市、商工会議所などにもお願いして、大谷を盛り上げていきたいですね」

平成26年度に約38万9000人だった大谷町の観光客数入込客数が、28年度には約62万5000人と、60%以上の増加を見せています。大谷資料館の再開も大き

局長は、一步一步積み重ねていく大谷石の魅力発掘を重視しています。

「11月18日には『石の街うつのみやシンポジウム』を開催し、大谷の未来について話し合います。翌日はエクスカッションとして宇都宮市内の大谷石建築物などを巡るバスツアーも開催します。今後はさらに活動を広げ、観光だけでなく、文化のすばらしさもより一層力を入れて伝えていきたいと考えています」

### 大谷の魅力をつル活用する

宇都宮市経済部都市魅力創造課大谷振興室の田代承室長は、

「大谷はさまざまな魅力を持つており、それをフル活用することで地域振興が可能だと考えています」

具体的には、大谷町にある大谷石採取場跡地などを活用した「地底湖クルーズツアー」や、地下空間にたまった冷水（冷熱エネルギー）を活用した「大谷夏いちご栽培」などがすでにスタートしています。

「大谷というのは、そう大きな観光地ではありませんから、マス・ツーリズムは難しいでしょう。それよりも、質の高さを感じていただいたり、ゆったりとした時間や空気を体験していただくようなツーリズムが合っているのではないのでしょうか」

宇都宮市では宇都宮大学なども協力しながら地域資源の調査を進めています。また、民間で始まった「地底湖クルーズツアー」などの試みも支援しています。

要因ですが、大谷商工観光協会のメンバーのがんばりが、少しずつ形になりつつあるのではないのでしょうか。

「今はまだ寂れて見える大谷町ですが、新しい店も徐々に出ています。体験型のレジャーもメニューが揃ってくるでしょう。新しい大谷に期待してください」

### 魅力再発見と啓蒙活動で新しい大谷へ

大谷石研究会の高橋事務局長が取締役を務める（前）高橋佑知商店は、江戸末期に創業した採掘・加工業者です。老舗であると同時に、新商品・新サービス合同プレス発表会で発表した「大谷染石」などの、大谷石を活用した新しい商品開発にも力を注いでいます。

「大谷石研究会ができたのは平成13年です。大谷石についてきちんと研究し、その成果を蓄積することにより、大谷石のすばらしさを伝えていきたいと考えました。特に、子どもたちに大谷石や大谷町についての正しい知識を伝えなくてはと、年2回広報誌を発行するとともに、小学生用の副読本を作つて昨年宇都宮市内の全小学校に配布しました。今年は先生が指導するための本やDVDを配布していく予定です」

また、大谷石が全国で使われていることにも着目し、すばらしい建築物を写真と文章で紹介する「大谷石百選」も発行しています。

「大谷石蔵は、宇都宮市には45000（※）も残っています。他の都市でこんなに

このように、採掘という産業を観光資源に転換する「産業観光」の手法が、大谷町には合っているのではないかと、田代室長は話します。

「ろまんちっく村や森林公園も遠くありませんから、自転車による周遊も可能です。地域全体の広がりの中で、観光産業をどう組み立てていくかを考え、さまざまな要素や方法論を検討しているところです」

今後を見れば、より大谷町に合った観光の創出だけでなく、それを成立させるための交通インフラ整備や、商業の活性化など、課題はまだまだ山積しています。

「民間でやる気がある人がどんどん出てきて欲しい。そういう人同士のマッチングや、さまざまな支援は、積極的に行つていきたいと考えています」

※ ※ ※

観光だけでなく、大谷夏いちごなど農業支援も活発化させ、大谷ブランドを確立させることをめざしています。

今回は大谷町の観光について取り上げました。宇都宮商工会議所でも、地域活性化委員会で大谷を含めた地域資源の活用を検討しているところです。いま注目の大谷町、新しいスタイルの観光である「産業観光」を軸に、さまざまな動きが今後現れてくるのではないのでしょうか。

（図1-3は宇都宮市調べ）  
※市政研究センターの研究では9000棟ともいわれる。